



No.5

2015.11.1

◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
◆tel・fax: 042-540-1663 (事務局)
tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)
E-mail: simin-siryo@nifty.com
www.c-archive.jp
◆正会員 1 口 6000 円、賛助会員 1 口 3000 円
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ

りょくいん 緑蔭トーク

第 1 期 ②③

報告

市民アーカイブ多摩では、クヌギ、コナラ、山桜などの木立に囲まれた会場の魅力を活かして、今年 4 月から「緑蔭トーク」(第 1 期)を始めました。ネットワーク・市民アーカイブとゆかりのある方をゲストに、会のメンバーが自然に囲まれたくつろいだ雰囲気の中、幅広い話題を提供していきます。

今回は第 2 回と 3 回目の報告です。2016 年度は第 2 期を計画中です。お楽しみに。

第 2 回 6 月 27 日

文明開化期の玉川上水

—下長淵村コレラ一件
杉山弘(町田市立自由民権資料館)

います。
三多摩の
移管は、神奈
川県と東京府
の府県境の変
更であり、審

今日は、私の本業である歴史資料館の学芸員としての立場でお話しします。玉川上水にちなんだテーマとしたのは、「市民アーカイブ多摩」がある、この風土や歴史に眼を向けてみようという趣旨です。

◆三多摩の東京府への移管

かつて多摩地域(南多摩・北多摩・西多摩各郡)は、神奈川県が管轄していました。3 つの多摩だから三多摩ですが、1893(明治26)年に東京府に移管されます。今から122年前のことで、その経緯に玉川上水が関わって

議、決議は国会でおこなわれました。大森鐘一という政府の役人が、境域変更法案の提案理由を次のように説明します。

“東京は飲用水を玉川上水に頼っており、だから衛生管理をしつかりなくてはならないが、管轄が違ふことが大いに不便だ。実際に飲用としているのは東京府民だが、玉川上水はその多くが神奈川県下にある”

こう指摘した上で、大森は1886(明治19)年、コレラの大流行の年に起きた危険なできごとについてふれています。

◆下長淵村のコレラ一件

コレラはコレラ菌による水系伝染病で、1884(明治17)年にコッホがコレラ菌を発見します。当時の日本には、まだこの医学的な知見はほとんど伝えられておらず、ましてや庶民レベルでは、疫病神がもたらす流行病(はやりやまい)ととらえられていました。吐き下しや下痢がどの流行病よりも激しく、罹るとわずかの時間でやせ細り、死んでしまうので、怖れられていました。

コレラは、ガンジス川流域の風土病でしたが、資本主義がもたらすグローバル化、

人と物、つまり兵士と商人、食料の移動によって、世界的な伝染病になってゆきました。アジア東端の日本列島にやってきたのは、幕末の1822(文政5)年、さらに1858(安政5)年、この時は軍艦ミシシッピ号の乗組員から広まったと言われています。その後、1877(明治10)年、79年、82年と流行があり、この年86年は、79年と並ぶ最悪の流行をみえています。

大森が言う“危険なできごと”とは、多摩川の上流域の西多摩郡下長淵村(現青梅市長淵)でコレラ患者が発生し、その患者の身のまわり品、生活

市民アーカイブ多摩公開学習会／「原点」から考える① 市民活動サービスコーナー時代を知る

2016 年は「ネットワーク・市民アーカイブ」の前身である「市民活動資料・情報センターをつくる会」の結成から 10 年目、市民アーカイブ多摩開館からまもなく 3 年目に入ります。開設と維持に追われた 2 年間でしたが、改めてこれからの活動方針や目標を確認するため、活動をふり振り返りながら、市民アーカイブ多摩の今後を考えていきたいと思っています。

2016 年 1 月 11 日(月・休) 13 時 30 分～16 時

会場：一橋大学職員集会室(国立駅徒歩 8 分)

・レポーター

①山家利子(当会運営委員、アンティ多摩)
「市民活動サービスコーナーの活動について」

②長島祐基(一橋大学大学院社会学研究科)
「市民活動サービスコーナーの資料群の整理」

③交渉中(市民活動サービスコーナー元利用者)

・コーディネーター：荒井容子(法政大学社会学部)

・資料代 300 円 ・申込不要、当日会場へ

用具、下着などを村内の川で洗浄した、というできごとです。これが当時の新聞に小さく報じられると、東京府民がパニックになります。下長淵村は東京から40〜50kmも離れているとしても、その細流は多摩川本流に流れ込み、さらにその水は玉川上水に取り込まれて、やがて東京府民の飲料水になっているではないか、というのです。

これは実現されないままになりますが、やがて1893年に、三多摩が神奈川県から東京府に移管されてゆく伏線になってゆきます。

◆まとめ

三多摩移管については、多くの研究の蓄積があり、さまざまながわかつています。衛生問題がそのきっかけであったことは、今見てきたとおりですが、もう1つ、移管の背後には、当時の神奈川県における自由民権派と神奈川県当局の対立がありました。第2回の衆議院議員選挙の時に、政府による選挙干渉が露骨に行われましたが、陣頭指揮していた一人が、当時の神奈川県令でしたから、自由民権派はこれを厳しく

追及しました。県令は辞任に追い込まれますが、捨て身の策として民権派の多い三多摩を神奈川県から切り離すことを画策しました。これが結果として移管に繋がりますが、これらは表沙汰にはならずとも、さまざまな情況証拠を並べてみると、背後関係が見えてきます。

こうした政治的な関係が伏せられていく一方、表向きの移管の理由として、衛生問題が語られてゆくことに、ぼくは着眼しています。衛生問題、あるいは衛生政策には、どのような意味があるのか、あるいはどのような問題としてとらえる必要があるのか、試論を重ねていくところです。

衛生問題、あるいは衛生政策

維新から間もないこの時期は、いかに近代化を図るかが明治政府の焦眉の課題であり、近代化、とりわけ心の近代化に衛生問題、衛生政策が大きな役割を果たした、と思います。清潔や健康を気にするあまり、むしろ病んでしまう時代、病気を怖がるあまり、病者を排除する社会、こうした社会は近代の1つ

の側面であり、衛生問題、衛生政策がこうした社会を構成する人びとの心をつくっていったと考えてみようと思うのです。
(杉山・記)



第3回 8月22日

ウルグアイのメモリアルミュージアム

— 軍事独裁政権による市民弾圧と抵抗の歴史を記憶に残す試み

荒井容子(法政大学)

◆ウルグアイとの出会い

ウルグアイはブラジルの南部とアルゼンチンに隣接する、人口341万人の、南米の小さな国です。

私はカナダのテレビ局がチリの軍事独裁政権の下での民衆の

抵抗運動を取材して92年制作したドキュメンタリー(99年にNHKが「パッチワークに願いを込めて」という邦訳タイトルで放映)や「五月広場の母親たち」の運動から、チリやアルゼンチンでの70年代の軍事独裁政権

の下で行われた民衆弾圧とそれに対抗する文化運動のことを、ずっと心にとどめていました。しかし、ウルグアイでも同様のことがあったことは、04年に大学の在外研究で国際成人教育協議会(ICAIE)の調査を本格的に開始しウルグアイを訪問するまで、知りませんでした。その後11年2月、14年3月にICAIE事務局のあるモンテビデオ(ウルグアイ)を訪問し、ICAIE前事務局長セリタ・エカーさんや、彼女を通じて紹介

してもらった女性運動、労働運動、農村教育運動など各分野の関係者に、軍事政権前後のことをお聞きする機会を得ました。聞き取りの中で、軍事政権(73年)以前、ウルグアイは民主的な諸制度が整い、学生参加による大学自治も進んでいたにもかかわらず、軍事政権下では、誘拐等により収監、拷問、そして秘密裡に殺害された人たちが多数のこと、また思慮統制がしかれ、職を追われ、さらに、亡命を余儀なくされた人も多かったことを知

りました。他方で、運動家がいぶとく生き抜いてきたのだという感触も得られました。

◆顔写真からフライパン、上映も
14年3月の訪問の際、ウルグアイでの軍事独裁政権下の民衆弾圧の記録を残すためのメモリアルミュージアムが07年に開設されたことを教えてもらい、訪問することができました。

モンテビデオの街中から外れ、バスを3〜4つ乗り継ぎ、古い公館を利用した建物の1



階を、大小8つのパートに分けて、展示を行っていました。

73年に軍事政権が登場する前後の様子から、84年の民政移管までの歴史が展示で描かれていました。牢獄で拷問に使われた道具、囚人服、牢獄の重い扉まで展示される一方、抵抗運動の中で使われた地下組織での印刷機、先を尖らせた針金を丸めた飛道具、デモで使用された誘拐された人たちの顔写真を張ったプラカードなどが展示されていました。抵抗の意思表示として、家の中で時間を合わせ、一斉にフライパンや鍋をたたいた話を聞いていましたが、鍋やフライパンもつるされていました。

軍事政権は政権継続を合法化するため81年に憲法改正のための選挙を行いました。このときの政権と反対派、両陣営によ

るポスターが展示され、また、当時放映された政治座談会の番組もテレビ上映されていました。

選挙に敗れた軍事政権はやがて弱体化し崩壊しますが、その直前、84年に、モンテビデオの中心部の大通りに大勢の人たちが集まってきた様子、そこで行われた集会の様子を写した大きな写真も、壁一面に展示されていました。

軍事政権下、多数の兵士が街中で銃を構えて人々を監視し、抵抗するデモ隊との小競り合いをきっかけに、民衆を叩きのめし、壁や道端で手を後ろに組んで立たせたり、うつぶせにさせたり、監獄へ輸送する装甲車に押し込める場面など、民衆弾圧の厳しい光景から、軍事政権崩壊後、亡命していた大勢の人たちが帰国し、歓喜と涙の中、通りで出迎えられるという感動的な



誘拐された人たちのプラカード

解放の場面まで、当時を振り返る関係者へのインタビューも交えた30分ほどのビデオも、スクリーンで繰り返し上映されていました。

◆家族の会話も緊張感

私が聞いた当時の話の中で、印象深かったいくつかのエピソードも紹介します。

ある女性運動家は、教職を追われ、その後化粧品販売員として生活の糧を稼ぐことになったが、その仕事は顧客との関わりを通して、当時の権力統制の問題を密かに話題とするのに好都合だったと言っていました。

夫が大学教員だった人は、突然兵士が家にきて、ライフルを付きつけられ、亡命せざる負えなくなり、また兵士たちにより地区を絞って一斉に家宅捜査、所持する書籍を調べる等の思想調査も行われたようでした。

貧しい学校財政を補おうと、農村の小学校でバザーを行った小学校の教員は、人々を集めたというだけで、危険人物だと認定されて教職を追われ、周りの人々から接触を避けられるようになってしまったそうです。

亡命者たちの中には、亡命先から地下組織を通じて本国に働きかけ続ける人たちもいたそうですが、隣国、アルゼンチンでの滞在が危険になると、お金があ

る人たちはさらに離れた国に逃れ、そうでない人たちは亡命先でも緊張を強いられる日々だったようです。

学校では生徒は短髪等、身なりを強制され、思想誘導も行われていたため、親が政権に不満をもつていても家庭の中で自由に話をするのができず、家族の会話でも常に緊張があったとのこと、この体験は今も、親子関係に尾を引いていることも分かりました。

また、軍事独裁政権が成立する前からすでに政府による統制的な政策が展開され、それに対する対抗的な運動が激しく展開されてはいましたが、当時は、それほどひどい人権侵害、弾圧がその後すぐに起こるとは予想されていず、フランコ政権による弾圧を経験していたスペインからの移住者でさえも、楽観的だったそうです。

◆弾圧の記録を残す重要性

このメモリアル・ミュージアムは軍事独裁政権が崩壊した後すぐにできたわけではありません。軍事独裁政権を担った政府関係者は処分されたようですが、軍事政権下の激しい民衆弾圧を総括する試みはすぐには行われませんでした。

05年に左派のバスケス大統領の政権が登場して、ようやくそ

の取組がはじまったようです。

モンテビデオ訪問時、スペインでフランコ政権下を生き抜いた女性にお話を聞く機会があり、彼女は、このメモリアル・ミュージアムの開館が遅かったとしても、フランコ政権の弾圧を記録に残すミュージアムをつくっていないスペインに比べれば、素晴らしい、と語っていたことが印象に残っています。

参加者とのやりとりの中で、「わたちの戦争と平和資料館(MAPA)」から参加してくださいという方が、カンボジアにポルポト政権下の民衆弾圧を記録する博物館ができていると紹介してくださいました。(荒井記)



市民アーカイブ多摩で所蔵する団体や個人が発行する会報・通信（ミニコミ）を発行者の方に紹介していただきます。

市民アーカイブ多摩で所蔵する団体や個人が発行する会報・通信（ミニコミ）を発行者の方に紹介していただきます。

当会が2000年に発足してから、15年の月日が経ちました。ニューズレターは現在季刊で年4回発行しており、今年10月で75号になっています。

内容は発足当時と変わらず、会員の自己紹介や日頃の活動で感動したこと、畑の農作物の出来不出来の話題など会員や見学に訪れた方などに記事をお願いします。

1 番の悩みは記事集めに苦労していることです、紙面は常に楽しそうな雰囲気を出すことを心掛けています。続けてきて良かったことは、気軽に話せる

素晴らしい友だちがたくさんできて、退屈なんて皆無です。

当会は市民ボランティア団体で、日野市市有の緑地保全が主な仕事です。公園ではないので、植生保護のため日頃は誰でも入れる場所ではありません。会員になると、黄色のバンダナがもらえ、それを付けて作業や観察のために緑地に入るができます。

里山保全は四季それぞれの作業があり、毎年同じことの繰り返しですから、いかに飽きずに作業するかがポイントです。春から秋までは草刈りで、冬は落ち葉掃き、その他台風の後など臨機の作業もあります。継続は力なりといいますが、最近ではベテランが増えて要領良く仕事を終えることが出来るようになりました。

草刈りの数日前には、植物保護チームが貴重な植物に赤テープで印を付けて回ります。これは大人数での草刈りで、間違って希少種が刈られたりするのを防ぐためです。

公式活動は毎月1～2回、50～60人の参加で午前中2時間の

公式活動は毎月1〜2回、50〜60人の参加で午前中2時間の



発行団体の「公民館をよりよくする会」は、住吉公民館主催事業「私たちと公民館」（83年10月～86年1月）の受講生が、1985年1月に立ちあげた自主サークルです。

講師の故奥田泰弘先生（中央大学から、参加・自治による公民館づくりには、まず市民が要望・声を積極的に出していくことが重要性だと学んだからです。ちょうど、現在の柳沢公民館が西武柳沢駅前の都営住宅建て

仕事を終えると、料理班の作った美味しい汁ものを皆で囲み、コミュニケーションの場となります。この春からスタンプ帳ができ、参加の度にスタンプを押し、8個揃ったら里山の産物をゲットできます。産物は季節ごとに色々あり、筍、ブルーベリー、栗、柚子、柿、カブトムシなど好きなものを選べます。

緑地に隣接し、会が運営管理する「アリスの丘ファーム」では、会員が区画ごとに思い思いの野菜を育て、家族の健康に役かっています。落ち葉掃きした葉が腐葉土になり、会員は自由に畑に運ぶことができます。土はふかふかになり、美味しい野菜が成長します。その成長を毎日見ている

替えに伴い公民館・図書館がで
きるという時で、私たちの活動
に見合った施設・設備を私たち
の手作りで、と意欲に燃えてい
た時でした。

『公民館をよりよくする会だより』の始まりは、会員への連絡

として手書き原稿での印刷発行でした。間もなく公民館に置き市民配布となりました。内容は、当時皆の最大の関心事である柳沢公民館建設に向けて市長・教育長への要望書・懇談、建設検討委員会の具体的情報等でした。更に開館に向けての準備室、配置する職員体制。それらに向けて市長・教育長との懇談・要望書等、具体的に記載し知らせました。はじめての道を創り切り開くだけに情熱・意欲・希望に満ちていました。

1992年7月号からワープ口印刷に、B5版で頁数も4頁→10頁になりました。

NO.258 2015年9月23日発行 公民館をよりよくする会
西原 眞

公民館をよりよくする会だより

津波速見・黒田とし子 T/F 042-642-3414

※※※※※ いま歴史について考えて (99)

日本近の歴史の教科書に学ぶ
——戦争と平和を心に——

日本近代史研究会 川村 孝二 大田 七郎

私は、アジア太平洋戦争の風潮の中、小中学校と中学校で大本国憲法と教育勅諭に基づいて教育を受けたが、「国史」(歴史教育)と「国術」(武道)を学ぶ中で、日本は海外に領土を求めたが、戦前は日本は不利なところでも、「国術」勉強を「戦」を学んでいた。

また、1945(昭和20)年の8月14日、大日本帝国が第二次大戦(第二次世界大戦)の敗戦を通告し日本は降参した。すると、敗戦後には、ポツダム宣言に基づいて国体体制の改革(一億市民が主権をもちた)と大東亜シニシズム(軍国主義)を排した。日本は戦前と戦後とでは、戦況は異なるが、戦況を学んでいたのだ。

さらに、少壮の時に戦争を体験して、日本は「どうして」戦勝したのかと、疑問を抱いた。この疑問について考えるために、歴史の教科書と戦後史を読み、戦前戦後の日本、日本の近代史を学ぶ事を勧められた。戦前と戦後、外交と軍国主義の歴史、教育文化、国民教育の一つを、戦争と平和の観点から考えるのが、私の目標だった。

日本近の歴史(大日本帝国)は、戦争の歴史から始まっている。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、アジア太平洋戦争、とほぼ一世紀にわたる大東亜戦争の歴史。アジア太平洋戦争は、日本が中国と戦った。日本の近代史の中心にわたる戦争の近代史は、いよいよ戦前とこの二つの問題点をめぐる戦前と戦後だ。戦争の戦前は、日本の政治の自由と平和を求めた国民のたたかひ。また、日本は軍国主義の道を歩いた。そこでは、戦争で、近代の日本の発展のため、日本の近代史の歴史を築こうと努力した。

1

(2 頁につづく)

- ・創刊 1985 年、500 部、B5 判、モノクロ、4 頁、月刊
- ・問合せ：tel・fax:042-461-3414
- ・当資料館所蔵：149-258 号※それ以前の号は法政大学環境アーカイブズ所蔵

△ 258 号内容＝連載「いま歴史に学ぶ意義について」、ひばりが丘公民館の分館存続に関する陳情、平成 27 年第 3 回西東京市議会文教厚生委員会を傍聴して、公民館運営審議会を傍聴して

と、こちらも元氣になります。会
員同士で苗や種やできた野菜を
交換するなど、ファームでは和や
かに交流が行われています。

当会は家族を単位として登録

していますが、ここ数年は常に
120家族前後で推移していま
す。里山の山と畑の間の、昔なが
らの循環を目指しながら、まる
で1つの家族のようなぬくもり

が感じられます。
見学、体験ボランティアはご連
絡ください。いつでも受け付け
ていますので、皆様のお越しをお
待ちしています。(田村はる子)

でもあり、主催者としての最大
のテーマです。から。
印刷・発行後、市長・議会・教
育委員会・各公民館・図書館へ
配布し、関係団体に発送します。

次号の内容や筆者は公民館活
動の中から生まれてくるもの
で、まさに公民館活動が即『だ
よ』の原動力でもあるといえま
す。(奥津とし子)

記憶と記録の場をめぐる旅⑤

保健婦資料館

健康と生活を守る活動を伝える

うことで、案内を
お願いした後藤さ
んがわざわざ松本
から車で来て穂高
駅から送迎してく
ださった。

◆募金を集めて

北アルプスの麓 信州・安曇
野の一角、穂高駅から山側に4
キロほど入ったところに、「保
健婦資料館」がある(セミナー
ハウスを併設しているので、
「保健婦資料館・セミナーハウ
ス」と呼ぶこともある)。

資料館は、当分の間利用のあ
る時以外は閉館しているとい

保健婦の活動は、前史がある
が、1941(昭和16)年の保健婦
規則によって制度化されてから
でも70年あまりになり、その間
日本の各地で地域に密着しなが
ら、人々の健康と生活を守るため
に、さまざまな活動を積み重ねて
きた。

しかし、近年、国の公衆衛生見
直しの施策が打ち出されるなか
で、多くの人たちが、このままで
は保健活動は次第に弱体化して
いくのではないかとという危機感
を持ち、保健婦の歴史を残し後進
に伝える場として、2001年に
資料館が開設された。

保健婦の人たちを中心に、1億
数千万円以上の寄付金を集めて
建設したという。運営には、NP
O 法人公衆衛生看護研究所があ
たっている。



展示室

◆セミナー室・宿泊室も

資料館は、800坪の敷地
に、鉄筋コンクリート1900
㎡の2階建ての建物からなる。

1階には、展示室・閲覧室、
資料室(書庫)のほかは厨房、浴
室、事務室がある。2階には、セ
ミナー室と、宿泊室として25畳
の和室と講師用のベッドルーム
(2室)がある。

所蔵資料は、保健婦、研究者な
どの個人や団体からの寄贈によ
るもので、寄贈者別に資料室に
収められている。

展示室には、壁面に年表が掲

げられており、3列に並んだ展
示ケースには、初期の保健婦の
全国大会の写真や参加者名簿、
保健婦のための教科書、訪問力
パンといったモノ資料から、近
年の阪神・淡路、中越、東日本大
震災時における保健婦(師)の活
動記録まで展示されている。

珍しいものでは、保健婦を主
人公にした映画を作るために新
藤兼人が書いたが、戦時下で映
画化が実現せず、幻となった脚
本がある。他に、著名な雑誌『岩
手の保健』が全冊揃っているの
も珍しいのではないか。資料の
目録は、現在人力中とのこと。

◆泊まり込んでの利用も可

資料館は、その資料の性質、
立地条件から、フリーの利用者
というのとは考えにくく、当分の
間は常時開館とはせず、見学や
利用の申し込みがある時だけ開
いているという。昨年は年間で
75日ほど開館したとのこと。宿
泊施設もあるので、なかには何
日も泊り込んで利用する人もい
るそう。また、風光明媚の地

にあるので、旅行の拠点や憩い
の場としても活用できるとのこ
と。

なお、「保健婦」の名称は、現在
は「保健師」となっているが、資
料館はそれ以前に設立されてお
り、かつその名称は単純な職名
としてではなく、歴史的な重み
をもった言葉なので、そのまま
で用いているとのことだった。

通常の経費は、年会費5千円
で、240名いる会員の会費と
寄付金でまかなっているそうだ
が、これだけの施設を作り、活動
を継続しているその熱意と力に
感銘を受けながら、資料館をあ
とにした。(平川千宏)

保健婦資料館

- ・所在地：〒399-8301 長野県安曇野市穂
高有明 3132-2 tel: 0263-83-7955
- ・事務局(見学・利用申し込み先)：
〒165-0027 東京都中野区野方 1-45-2
菊地方 NPO 法人公衆衛生看護研究所
tel・fax: 03-3386-8837
- ・現地担当連絡先(上記事務局に連絡が
つかない時)：
tel・fax: 0263-47-2209 後藤

自発性が持つ風通しの良さ

中村 元

私が市民活動資料に出会ったのは、現在、編さん事業がおこなわれている八王子市史の専門員として、近現代の八王子に関連する歴史資料を集める仕事に携わっていた5年ほど前のことだった。八王子市史の近現代分野では、その後現在までに、主に八王子市及び合併された旧町村の歴史的公文書を中心に編さんされた『新八王子市史 資料編5 近現代1』、個人のお宅や市内の諸機関などで保管されていた歴史資料を中心に編さんされた『資料編6 近現代2』の2冊が刊行されているが、当時はこ

の資料編編さんの前提となる作業として、明治維新以後から1990年頃までの近現代の八王子にまつわる歴史資料をできるだけ広く集めることにつとめている段階であった。この仕事の中で、「市民活動資料・情報センターをつくる会（現・ネットワーク・市民アーカイブ）」（以下、資料センターの会）に関わっておられた杉山弘さんや増沢航さんには、市史編さん専門調査員としてご協力を得ており、その縁で資料センターの会事務局の江頭晃子さんをご紹介いただき、市民活動資料が保管されていた立川の旧小学校の建物で資料を

閲覧させていただいた。

□宝さがしのような資料閲覧

しかし「資料を閲覧」といっても、事前に目録でチェックをしていた資料は、当時は旧小学校の建物の倉庫の中の、500箱におよぶ段ボールに収納され保管されており、まずは倉庫から段ボールを運び出し、それらの中身を確認するところからの作業スタートであった。当日は、資料センターの会の方々、八王子からの作業チームが参加し、70年代以来の多摩地区の市民活動資料が収められた段ボールを次々に運び出し、中身を確認した。八王子のチームは、戦後八王子の市民活動、特に都営住宅のコミュニティに関する資料などを探して箱の確認を行なったが、

この作業の中では当初必ずしも注目していなかった環境保護運動など様々な活動に関する資料も発見され、その作業は何か宝探しのようでとても楽しかったことをよく覚えていた。またこの作業の中では、資料センターの会の五味正彦さんに、八王子の様々な有機農業などのグループのミニコミなどについて教えてもらったこともよい思い出である。これらの資料は、紙幅の制約もあり残念ながら上記の資料編に収録することはできなかったが、私にとって以上の作業は、戦後の多摩地域―八王子で展開していた、歴史の中の様々な市民活動、またその資料の保存を志す現在進行形の市民活動の双方の魅力に触れ得た貴重な経験だった。

□希有な時代の戦後70年

今年は戦後70年目の節目の年であるが、この70年は、人々がオフィシャルという意味での「公共」の範に必ずしも制約されることなく、社会の様々なテーマに自発的に取り組む市民活動を展開し得た、日本の歴史の中でも希有な時代であったように思う。上記の作業の中で私が市民活動に感じた魅力は、この自由―自発性をもつ風通しの良さ、爽やかさであったと感じている。懸念材料の多い昨今ではあるが、今後もこれまで以上に様々な市民活動が自由に、風通し良く展開し、その活動を記録した資料が市民アーカイブ多摩に続々と蓄積されていくような社会が続いてほしいと切に願っている。

（なかむら・もと新潟大学）

インターンシップ を体験して

―行動する資料「ミニコミ」
との9日間―

野口萌恵

十文字学園女子大学



8月～9月中旬にかけて、十文字学園女子大学の図書館司書資格課程を履修している野口萌恵さんをインターンとして「市民アーカイブ多摩」に迎えました。ご本人にインターンシップ体験レポートを書いていただきました。

●ドキドキしながら

今年の夏のインターンシップは、自分にとって

とても貴重な経験ができたと感じました。今回参加させていただいた「市民アーカイブ多摩」は、「ミニコミ」を市民のために保管し、提供しています。またその活動は市民の方たちがボランティアで行っています。大学の司書資格担当の先生からは、「なかなか触れることができない資料がある」という大まかな話しか聞いていなかったこともあり、初日までどんな場所

なのかドキドキしながら向かいました。また、インターンシップとは他の大学の学生と一緒に参加するものだと考えていたため、実際に行った際に自分以外はいないということも不安でした。しかし、参加してみると皆さん暖かく迎えてくださり、不安を感じなくなるくらいアットホームな雰囲気でした。

●緑の中の資料室

「市民アーカイブ多摩」は、駅から歩いて8分ほどで、玉川上水が近くを流れ、周りに畑もありのどかな場所にあります。また、「市民アーカイブ多摩」の敷地内は、立川市の緑地保全地に指定された樹林地に隣接しています。今年の夏は暑かったですが、市民アーカイブ多摩は、大きな樹木に囲まれているからか自然に入ってくる風がとても涼しく感じられました。

●掃除、資料整理、見学も

最初の日はネットワーク・市民アーカイブのこれまでの経緯や、施設の説明を受けました。

毎回の仕事は、開館準備のための掃除、「開館中」の札を出すお手伝いから始まり、ミニコミ各号をパソコンのデータに入力、ミニコミを書架のファイルに繰りこみ、ラベルづくり、蔵書点検、緑蔭トークの準備、来客者対応、レポート作成などをしました。



期間中に、同様に市民活動資料を収集・提供している立教大学「共生社会研究センター」の見学にも参加させてもらいました。大学だけあって、とても広い場所が確保されていて、大学内にミニコミを収集する場所があるのは、とても羨ましく思いました。

●すっかりしたレファレンス

市民アーカイブ多摩では、柵に何が配架されているのかなどの表記がしっかりとされている。初めて訪ねる利用者もわかりやすいと感じました。また、ボランティアの人やスタッフがしっかりと、利用者の資料探しをサポートします。資料を探さなくても、利用者とのコミュニケーションを取っている姿を

みて、温かい雰囲気を感じていて、資料が少ない分、利用者には、どのようなミニコミを紹介するのが良いのかなどの判断がしやすく、しっかりとレファレンスすることができるところが特徴的だと思いました。また、開架式なため利用者自身が書庫で実際に資料を手に取り、閲覧することが出来ます。自分で資料を見ることが出来ます。自分で見つけられない資料にも触れることができます。この団体はこういったミニコミを出している！などと、自分がインターンの期間中に感じたことがあり、いつの間にか利用者の目線で書庫にある資料を見ていました。

●自分から行動することが大事

「市民アーカイブ多摩」でのインターシップに参加して、自分から行動することの大切さを知りました。普段の生活の中で率先して行動し、自分から行動することができればもっと自分のやりたいことが自由にできるのではないかと思います。

自分にとって新しいことや知らないことを知るきっかけがあれば、どんな興味を持ったことに對して自分から行動していくことができるのは今しかないと思うので、自分から人に声をかけたり、行動していきたいと思っています。

私のおすすめミニコミ

インターシップ中に興味を持ったミニコミを紹介します。

『Fonte』

「NPO法人全国不登校新聞社」が発行し、不登校の当事者とその家族が多く関わり、不登校・ひきこもりだけでなく、いじめや教育全般にかかわる記事も掲載されています。『Fonte』は、ラテン語で「源流から」の意味があり、不登校から見えてきたことを源流として、広く子どもに関わる問題や、ひきこもりや社会のあり方について考えていくミニコミです。

私が気になった記事は、母と娘それぞれの立場から聞く「不登校」についてです。娘がなぜ学校に行きたくないと感じていたのか。また、母親は不登校になりつつある娘をどう思っているのかなど、不登校について悩んでいる親や子どもにとって、自分たちと同じ悩みを持つ人からの情報はとても貴重なものだと思います。自分1人だけが



不登校なわけではない、他の子どもも自分の子どもと同じであるとかわかって安心する親や、どう接していいのかわからない親にとっては、心強い味方のような存在ではないかと考えました。

実際に不登校の生徒は多いです。そんな社会の中で自分の子どもは大丈夫なのかと心配する親もいます。このミニコミは、様々な形の不登校について書かれていて、読んでみると知らないことや、不登校ってどこからが不登校だろうと考えるきっかけにもなり、不登校に対する考え方が少し変わります。(タブロイド判8頁、月2回発行、購読料820円/月、tel:03-5963-5526)

『どうぶつ会議』

「NPO法人自然と動物を考える市民会議」が発行し、動物に関する問題が取り上げられています。特に猫や犬についての記事が多いですが、その中で気になった記事が「盲導犬」

「猫の街不安」「犬処分」です。盲導犬についての記事は、盲導犬が何者かに刺されたという痛々しい事件についてでした。この記事では「盲導犬が吠えない訓練をされている」という誤解があるが、こう



いった訓練はされていない」と書かれていました。犬処分についての記事では、茨城県が犬処分ファースト返上へ向け、運動を行っているといった内容です。全国各地ではこういった問題が今もまだ解決していません。私の知り合いも同じような運動をしており、署名を集め、少しでも救える命を保護するといった活動をしている地域もあります。この記事では、こういった運動を行っている団体の活動内容が載っています。犬や猫など動物が好きな人や、保護活動している人たちが必要とする情報がこのミニコミから得ることができると考えました。私もミニコミを手にとったきっかけは、動物が好きだからです。こういった些細なきっかけから、今こういった問題が起きているといった記事を見かけ、興味を持つ人もいます。(A4判12頁、年3回発行、年会費4千円、ジュニア・シニアは2千円、tel:03-3391-1733)

アーカイブ多摩 目次

◆蔵書点検

初めての蔵書点検を行った。
データベース上のリスト約1300タイトルを打ち出し、実際に現物があるかどうかの確認。1人が分類とタイトルを読み、もう1人が現物を探し、そのタイトルがあれば、横に倒していく。現物が無いファイルはリストで分り、リストに無いが現物があるファイルは、横倒しにされずに残っていく。根気の作業だったが、改めて自分たちが収集しているミニコミを確認することができ、必要な資料整理も見えてきた。

◆インターン受け入れ

当会初めての試みとして、この夏インターンを受け入れた。1回だけの見学が多いが、連続して通ってくれる学生さんは初めてで、運営委員会で毎回のカリキュラムの内容や担当者をしっかりと決め、緊張しつつ迎え入れた。「有意義な時間になるように」「ミニコミの魅力に触れて欲しい」というこちら側の願いは果たして伝わったのか、ご本人のレポート(6頁)参照。素朴な質問や若いパワーから、エネルギーをもらった夏だった。

◆法政大学来訪、立教大学訪問

当会が保存活動をしてきた70年代から02年の資料を受け入れてくれた法政大学「環境アーカイブズ」のスタッフの皆さんが8月22日に来訪してくれた。9月1日には、大学内で場所を移動した立教大学「共生社会研究センター」を訪問し、資料の配架や整理方法を見学させていただいた。「市民活動資料」の収集・保存活動をしている3施設、今後もつながりを深めていきたい。

運営委員会など

6月19日 第3回運営委員会。参加者6人。会員・カンパ者報告、総会反省と感想、15年度活動計画内容について、インターン受入、第2回緑蔭トーク役割分担、一橋大学訪問、各部会からの報告(他)
6月27日 緑蔭トーク第2回開催。参加者25人。
7月17日 第4回運営委員会。参加者7人。会員・カンパ者報告。市民アーカイブ当番確認、明星大学訪問報告、インターン受入、『アーカイブ通信』4号反省(他)
8月21日 第5回運営委員会。参加者5人。会員・カンパ者報告。当番体制確認、蔵書点検について、電磁波関係資料整理、インターン状況、見学対応、緑蔭トーク役割分担(他)。
8月22日 緑蔭トーク第3回開催。参加者18人
9月18日 第6回運営委員会。参加者6人。会員数等報告。インターン・蔵書点検経過報告。見学、緑蔭トーク反省。今後の企画、『通信』巻頭言内容検討、電話当番他。

ご意見・メッセージ等

・緑蔭トークに参加し、とても勉強になり、また楽しい時間を過ごさせていただきました。
・設立の経緯や現状のお話をうかがい、大変勉強になるとともに、われわれの資料室に生かせる点が多くありました。いかに自分たちの存在を知ってもらうかそのために始められた緑蔭トークは、学ぶところ大でした。
・アーカイブ通信4号は、全体として読みごたえのある内容でした。いただき、ありがとうございます。
・何もお手伝いできない状況ですので、せめて多少のカンパで応援したいと思っています。必要な物がありましたらお知らせください。

カンパ等ありがとうございます

内田純一、大西信也、岸中友子、久保田ひろみ、是枝洋、佐藤啓子、中村光一、山口真理子 (2015.6.9 敬称略)

会員数(2015.9)

・122人(正会員61、賛助会員61)

◆新規入会ありがとうございます(敬称略)

・正会員 井上スズ、内田純一
・賛助会員 坂下香澄、中村光一、林喜代三、平野都築

編集後記

9月24日は、当会の元運営委員五味正彦さんの三回忌。市民アーカイブ多摩の主(あるじ)の1人になるはずだったのに、彼のパソコンと東京の材木で作った机が代わりに私たちを見守っている。大変だけれど、頑張ってるよ！ (湯・増・江)

【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(お盆休み・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：13時～16時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-9 6-7
(多摩モノレール、西武線「玉川上水駅」南側徒歩8分)
- ・電話& fax：042-5336-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降の市民活動団体や個人が発行しているミニコミ(通信や会報など)1200タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。
www.c-archive.jp

